

# 白柳秀湖『維新革命前夜物語』の特質（1）

—初期社会主義者・民間史家による「維新革命」再論—

小畑嘉丈\*

## On Shirayanagi Shuko's "the story of the eve of Meiji Revolution"

—a revision of Meiji Revolution by an anti-academic historian in 1930s—

OBATA Yoshitake\*

### Abstract

Shirayanagi Shuko was an early Japanese socialist and an anti-academic historian. He defined Meiji Ishin as bourgeoisie revolution. His analysis of Meiji Revolution was based on theories of his preceding thinker, Yamaji Aizan, Miyake Setsurei and Fukuzawa Yukichi, who were anti-academic historians, too.

キーワード：維新革命，民間史学，転向，講座派

Keywords：Meiji Revolution, anti-academic history, conversion, Koza-ha

### 1. はじめに

丸山眞男に先立って、荻生徂徠と福沢諭吉を最も注目すべき日本の思想家に位置づけた民間史家がいた。白柳秀湖である。「福沢諭吉はいはゆる伝記の上からは、荻生徂徠と全然無関係の人物である。しかし、その哲学に於いても、史学に於いても、両者の間は、目に見えぬ太い、不朽の思想的連鎖で、しっかりと結びつけられて居る。その経験的な、実証的な、功利的な哲学のほひ、その経済的な、社会的な、演繹的な史学の色調、両者は正しく日本の思想界に巍然として相呼応する最高峰である」<sup>1</sup>。

秀湖の史論・史伝は今日ほとんど忘れ去られているが<sup>2</sup>、本稿で主に取り扱う『維新革命前夜物語』などのように、読み直すに値する内容をもつものもあり、また彼の歴史作品を読み解くことは、昭和戦前期の民間史学の一隅を照らすことにもなる。以下では、まず『維新革命前夜物語』の概要を再現し、

ついで秀湖その人と、その同時代における評価を見、先行研究を検討しながら本稿の秀湖に対する立場を明確にし、その後『維新革命前夜物語』の各論を改めて詳論し、白柳史学を明治以降の民間史学の系譜のなかに位置づけることを目指す。

後述するように、本稿では秀湖の活動期間を「文学期」、「史論期」、「民族期」の3期に分けるが、『維新革命前夜物語』は「史論期」の総決算に当たる作品であり、改訂版を考慮に入れると、最晩年の作品でもある<sup>3</sup>。「史論期」の最初の作品は『町人の天下』（1910・明治43年）だが<sup>4</sup>、その後直ちに「史論期」が本格化するわけではなく、1927（昭和2）年までは文学の創作と史論の構築が交錯している。その象徴が「社会講談（新講談）」であり、秀湖はプロレタリア文学の確立に向けてこの運動を始めたが、講談ゆえ、もちろん歴史物語でもある。秀湖は社会講談を書きながら関心を維新史に寄せていった。そのことは社会講談の最後の作品となったのが「岩崎弥太郎」と「坂本龍馬」だったことに表れている。これらは共に1927年に連載を終えて

\*理工学部共通教育群非常勤講師 Part-time Lecturer, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

おり、ここから秀湖は史論に集中し、ほぼ毎年歴史作品を発表していった。1929年に発表した『財界太平記』（翌年に続編を刊行）、1931年の『日本富豪発生学』、そして『維新革命前夜物語』は全て都市ブルジョワをキーワードとして維新史を論じたものであり、1929年の『西園寺公望伝』も、「公の伝記であると同時に日仏ブルジョア革命史論であり、日本ブルジョア政党政権争奪史」<sup>5</sup>であると述べており、問題関心が明治維新をブルジョワ革命として描くことに集中していることがわかる<sup>6</sup>。

## 2. 『維新革命前夜物語』概説

秀湖が本書で論じようとしたことを端的にまとめると、官製『維新史』<sup>7</sup>など「在来の歴史」<sup>8</sup>を批判して、維新革命を成し遂げたのは各藩下士階級だが、それを束ねたのは『大日本史』や『日本外史』などに鼓吹された尊王攘夷思想だったのではなく、各藩下士階級とは「徳川半郡県的封建体制」の自壊過程の中で台頭してきた「町人」（＝都市・地方ブルジョワ、「中間的社会階級」）であり、ブルジョワ革命は歴史的必然だったこと、萩原重秀による元禄改鑄は日本史上初の「金融措置」であり、これがデフレ・インフレ循環の発端となり、景気が振幅する度に大名と民衆が弱体化する一方で商人層は力をつけていき、自給自足経済が貨幣経済へと変容していったこと、そうした徳川経済体制の最も正確な理解者は萩生徂徠であり<sup>9</sup>、その徂徠『太平策』をテキストとして幕府独力での最後の「革命」に挑んだのが水野忠邦の天保の改革であったこと、である。また敗戦後の改訂版では、本書の着想を得た1933（昭和8）年が大日本帝国の「終わりの始まり」だった、という論点加わっている。最晩年に秀湖は、長年持論としてきた経済史観に基づいて維新史の読み替えを改めて提示し、かつ敗戦の総括を試みたものと考えられる。

秀湖は「社会の進歩、文明の推移が、或る偉大な学者・思想家・の営為し、計画するところにはじまると見るのは、一つの歴史観には相違ないが、世界に行はれる歴史観のすべてではない。人生には事物の自然に『成る』半面と、事物が人間の意図計画によつて『為される』半面とがある」<sup>10</sup>と述べており、

維新革命が『大日本史』と『日本外史』を出所とする尊王思想によるのではなく<sup>11</sup>半郡県的封建体制の自壊作用とみるのは、「為される」歴史観から「成る」歴史観への転換を示すものであった。

秀湖にとって『大日本史』と『日本外史』は、事実として維新革命の原因ではなかったのみならず、歴史理論的な批判対象でもあった。秀湖は『大日本史』と『日本外史』の基礎理念は「朱熹・程明道・を祖とする宋儒の性理学説に置いてある」<sup>12</sup>とし、「かれらが支那の歴史を批判するに用ひた正邪曲直・是非善悪・の尺度を以て日本の歴史に当て嵌め、皇統の正潤（原文ママ）を論じたり、皇位継承の争闘を中心として捲起された臣子の去就（大義名分……原注）を論じたりすることが、果たして正しい手法であろうか。歴史はどこまでも客観的事実の生成及びその発展に対する忠実な記述でなければならぬ。宋儒の倫理学説を基礎理念として書き下ろされた水戸光圀の『大日本史』や、頼山陽の『日本外史』はほんとの歴史ではない」<sup>13</sup>と断じる。それに対して「客観的事実の生成及び発展を忠実に記述した萩生徂徠の歴史はくらべものにならぬほど学問的なものであり、純正な歴史に近いといふことが出来るのだ」<sup>14</sup>として秀湖は徂徠学に高い評価を与え、朱子学的な歴史理解を批判している。秀湖にとって徂徠は「日本の生んだ最も偉大な歴史家」<sup>15</sup>だった。

秀湖は、徳川経済体制の「病理」を正確に観察し得たのは徂徠だけだったと言う。「たゞ柳澤吉保に用ひられ、柳澤を介して將軍一綱吉の政治顧問の地位にあつた萩生徂徠だけが、幕府の財政機構として設定されていたポンプを解体して、その内部の欠陥を明かにし、ポンプの設定されてゐた地盤を掘下げて、水脈の当否を検査した」<sup>16</sup>。徂徠の検査によれば「幕府のポンプの設定されてゐる地盤に隣接して、幕府のポンプの馬力に幾十倍する別のポンプが設定されて居り、地下水はその方に吸い上げられてゆく」<sup>17</sup>。その「別のポンプ」が「『分限者』と呼ばれた大町人階級であつた」<sup>18</sup>。ここで秀湖は自らの経済史観と徂徠学をほぼ重ねて論じている。また、徳川幕府が、力を蓄えてゆく商人階級への課税について最後まで苦勞していたことは今日の日本史研究も明らかにしているところである。

秀湖は、徂徠の分析は正しかったが「臨床措置」

を示すところでは「狡く逃避した」<sup>19</sup>と評する。つまり、「かれには封建制度の癌腫である全国各地の大商業都市と、大商業都市の上に深く根を張り、広く枝を拡げている大町人階級に対して、外科的切除手術を施すことのできるまでに全く手遅れであることがよく分つてみた筈だ（中略）しかし、かれはその診断書と臨床措置とを要求された将軍に対して、病すでに膏肓に入り到底救治の見込みなしとは直言することが出来なかつた」<sup>20</sup>。代わりに『太平策』では「幕府の財政的疾患を根本的に救治せんとせば、諸大名・諸武士・を江戸に参勤させ、もしくは主人の城下に呼集めて、各自の領土及び領土の生産する富と全然没交渉且つ無関心な生活を営ませる現在の制度を根本的に釐革する以外に途はない。それが為には御城下（江戸……原注）がさびれ、町人が亡びても何等顧慮する必要はない。もともと町人は封建制度の余計ものである。諸大名・諸武士・の都会生活はいはゞかれらを『旅宿の境涯』（消費のみの生活……原注）に置くもので、たゞ町人階級を肥らせる以外、御世安泰の為には何の効果もあるものではない（中略）諸大名・諸武士が領土に帰著し、土地と土地の産出する富とに切実な利害感が持てるやうになれば御世は万々歳」<sup>21</sup>と述べていると、「旅宿の境涯」論や土着論に着目しながら徂徠の説を祖述している。この徂徠の「臨床措置」を評して秀湖は「徂徠は徳川氏の為に徳川氏の方でなし得る、徳川氏の天下の長久策を講じたものに過ぎなかつたのだ。『徂徠学』は畢竟するに封建的特権階級の学であつて、封建的被支配階級の学ではなかつた」<sup>22</sup>と結論する。

水野忠邦は、幕末に至って徂徠の「臨床措置」を「切札」として「封建革命」に挑んだ政治家だった、というのが秀湖の見解である。「徂徠の『太平策』が出来ない相談と知つてか、知らずにか、徂徠の『太平策』をそつくりそのままお手本として、これを実行に移し、すでに寿命の尽きた徳川氏の封建制度に活を入れようとして起上がった政治家があつた（中略）水野越前は、只のデフレ政治家ではなかつた。かれは天保のデフレ政治をその『強権発動』の籠手しらべとして断行したものであつた。かれは最後の切札として、荻生徂徠の『太平策』を計画書とする『封建革命』をその懐中に秘めてみたのだ」<sup>23</sup>。し

かし水野は「封建革命」に挫折し、その後は徳川幕府が独力で改革をする力を失って文久の改革が行われ<sup>24</sup>、その後には下士階級（＝都市・地方ブルジョワ）革命としての維新革命が実現する、というのが秀湖の維新史の見立てである。したがって本書は講座派批判の書でもある。「近頃の若い経済史家の中には、事新しく日本の明治維新をブルジョア革命でないとして異を立てる人もあるやうだ。それらの人の鹿爪らしい官学的手法は、何ほどか世間のこけを威すに効果があり、日本の事情にくらい外国の歴史家の中にも、それらの説に誤られて日本の明治維新を一種の『封建革命』であるなど論ずるものゝあるやにきくのはいかにも笑止千万なことだ」<sup>25</sup>。明治維新の社会変革を重視する初期社会主義者だった秀湖と、当時30代だった講座派の歴史家たちの明治維新をめぐる見解は、全く分かれていたことになる。なお、秀湖は講座派批判の論拠として福沢諭吉『旧藩情』を挙げている<sup>26</sup>。『維新革命前夜物語』では『旧藩情』に詳しく触れていないが、「福沢諭吉と荻生徂徠」では『旧藩情』について「廢藩置県後も容易に解消されることなしに残つて居た旧藩士間の階級的反目が、事毎に破裂して地方の進歩発展を妨げ、延いて国家の一大患害を醸しつつあることを慨し、その嫉視確執の由つて来るところを明かにして、旧藩士の反省を促したものらしい（中略）殊に福沢のすぐれてみたことは、かやうな階級制度は、どこの藩にもあるといふ、普遍性を喝破していたことだ」<sup>27</sup>と述べており、上士と下士を一体視して、維新革命以後も封建性が残ったという見解に異を唱えているものと解される。上士階級と区別される下士階級は、秀湖にとっては都市・地方ブルジョワの一形態であつた。

秀湖は『維新革命前夜物語』の着想を得た光景を次のように描写している。「昭和8年10月10日の夜であつた（中略）著者の書斎の窓に淡い夢のやうな月の光とともに、静かに流れ込む揺落の風につれて遠くかすかに聞えて来る東京音頭の太鼓の音と、それに合せて手拍子・足拍子・面白くをどり狂ふ男女のあやしい聲をきいた瞬間、一種の不思議な靈感を授けられた。その靈感によつてこの物語の構想がたちまちにして成り、筆効がすらすらと挙つたのであつた（中略）一体民衆のこのうかれ方は何

事だ。今は満州事変が国際道義の罅を突破つて、連盟脱退とまで突進んだ国家の興廃存亡の決する大切の瀬戸際だ。この音頭はたゞの音頭でないぞ。国民は今、日本がこの春の国際連盟脱退を機軸として、やがて当面しなければならぬ曠古の国難を直覚して反射的に、歌ひさゞめき、踊り狂つてゐるのだ。古老の話にきいてゐる維新前夜の『神符音頭』もたしかにそれだ<sup>28</sup>。秀湖はここで幕末の「神符音頭」（＝ええじゃないか）と、東京音頭に踊り狂う昭和8年の民衆を重ねている。大日本帝国の崩壊はこの時から始まっていたと戦後の秀湖が考えていたことを示唆するくだりである。

なお、秀湖は第一次吉田内閣の吉田茂と石橋湛山を水野忠邦になぞらえている。となると、次なる革命が近づきつつあることをも示唆していることになる。「水野越前守忠邦が（中略）『封建革命』に乗出した時の幕府の財政情態は、現に著者がこの著書を校訂しつつある昭和22年3月現在、敗残日本の吉田内閣が、石橋蔵相を活きた盾として真向に押立て、資本主義制度擁護の為に共産党及び左翼社会党の陣営に対し、最後の一戦を挑まうとしてゐる現状と頗るよく似たものがあつた」<sup>29</sup>。吉田内閣の後には、憲政史上初めて社会党政権が成立するので、秀湖の予測は一部当たったとも言える。ただし秀湖が議会政治の枠内での政権交代をイメージしていたのか、明治維新のブルジョワ革命からプロレタリア革命への前進を夢見たのかは、定かではない<sup>30</sup>。

### 3. 白柳秀湖について

白柳秀湖の履歴と彼へのこれまでの関心については、上笙一郎「白柳秀湖についての一考察—その大衆史論家へのあゆみ」の一節がよくまとまっている。秀湖は「明治30年代の終り頃に一個の革命的ロマンチストとして文壇に登場、明治の社会主義運動の拠点だった平民社の外郭で革命的な文学雑誌「火鞭」を発刊し、大正期のいわゆる社会講談の提唱・創作から、大衆史論家として昭和の大衆に大きな影響をあたえ」<sup>31</sup>た文筆家だった。

秀湖白柳武司は浜名湖のほとり、静岡県気賀町に1884（明治17）年に生まれた<sup>32</sup>。1899（明治32）年、上京して郁文館中学に通い、そこで偶然島崎藤

村『若菜集』を読んで文学に目覚める。後に歴史家として名を成した秀湖だが、原点は文学と自然愛好にあった<sup>33</sup>。本稿では秀湖の活動期を三つに分け、『若菜集』との出会いから『黄昏』を刊行する1909（明治42）年までを「文学期」（第1期）と規定する<sup>34</sup>。

更に早稲田大学に進んだ秀湖は、平民社に出入りするようになって堺利彦の知遇を得る。堺との交友は生涯続いた<sup>35</sup>。また、二人には社会主義運動に身を投じながら山路愛山に強く影響を受けているという共通点もあった<sup>36</sup>。卒業後は隆文館に就職し、1907（明治40）年に同社から最初の単著『離愁』を出版する。1909（明治42）年には『黄昏』を上梓し、この2冊によってプロレタリア文学の代表的作家と認識されるようになった。特によく知られているのが『黄昏』に収められた「馱夫日記」であり、後年の秀湖への関心は、主に同作と、これを収めた『黄昏』に向かっていたといえる<sup>37</sup>。

秀湖は1910（明治43）年に『町人の天下』を発表し、これが歴史作品の初めである。「町人」を秀湖は都市ブルジョワと捉えており<sup>38</sup>、「町人」に着目した維新史研究が昭和0年代には『日本富豪発生学 下士階級革命の巻』や『維新革命前夜物語』などの史論に結実する。そこで本稿では『町人の天下』から『維新革命前夜物語』までを「史論期」（第2期）と規定する。「社会講談の提唱・創作」はこの時期に含まれる。秀湖らの提唱により、『改造』大正9（1920）年6月号に「社会講談新欄設置予告」が出され、毎月社会講談が創作されていった。秀湖も「藤十郎と富蔵」（1921・大正10年）などを発表した。1927（昭和2）年で社会講談の創作を終えたことは既に述べた。元々、秀湖は社会講談をプロレタリア文学確立の階梯と考えていた。

『維新革命前夜物語』と同年に秀湖は『日本民族論』を発表し、以降「民族」という言葉が書名に含まれる作品が増えていく。本稿では『日本民族論』以降を「民族期」（第3期）と規定する。この時期の秀湖の代表作は『民族日本歴史』全5巻（1935・昭和10年）であり、最後の作品も、戦後に発表した『世界文化史上の日本民族』（1948・昭和23年）であった。1939年には民族文化研究所を設立し、機関誌『日本民族』を月刊で発行していた。1940

(昭和 15) 年に改訂版を出版した『日本経済革命史』の序文では、民族文化史研究によって持論である経済史観を更新しながら著述に当たっている旨を表明している。

「町の歴史家」を標榜し、アカデミズムに対抗意識を持ち続けた秀湖だったが、1940 年 4 月以降は立命館大学で特別講義を担当した<sup>39</sup>。しかし敗戦後、1948 年に『太平洋争覇時代』(1941・昭和 16 年)が問題とされて著述家追放の仮指定を受け、1950 (昭和 25) 年に亡くなった。

既に見たように初期社会主義者として出発した秀湖だったが、思想遍歴については自ら「筆者は山路愛山の書いたものから史学に入り、遡つて福沢諭吉に学び、後親しく三宅雪嶺先生に就いて啓発をうけることの大かつたもの」<sup>40</sup>と回想している。続けて「徂徠は『夷人物徂徠』の一件からひどくえせ愛国者の批難を買ったが(中略)それはちやうど福沢諭吉が(中略)最近までもドイツ流の学問、思想を宗とする官学者流からは、学者として共に齢することを恥づるものの如くに取扱はれて来たのとよく似て居た」「徂徠がもし諭吉の時代に生れたとしたならば、彼も恐らくは、学問をドイツに限らずと喝破し、行実の存するところ、大なる思想、大なる哲学なかるべからずと絶叫して、イギリスに学んだであらう」<sup>41</sup>と述べているところからすると、雪嶺・長谷川如是閑ら「反ドイツ学」の在野の思想家の系譜のなかに位置づけることもできそうだが、1907 (明治 40) 年には「妄りに科学的組織を冷笑して「常識」を誇り、炭水死灰の如き微温の説を以て、其位置を曖昧にし、双者の欠点を指摘するを以て能事と心得る英国政治学者の説にして稍古きものカーライル、エマルソンの思想は山路愛山、之を代表し、稍新しきもの、則ち英仏の反動的保守主義者の説とも見る可きは、近頃読売の竹越三叉之を代表す」<sup>42</sup>と論じており、反ドイツ的な立場をとるようになったのは 1910 年代半ばから雪嶺の警咳に接するようになってからのことだったのかもしれない。この時期、秀湖は雪嶺の口述筆記も担当していたという<sup>43</sup>。

#### 4. 白柳秀湖の同時代における評価

今日では忘れられかけている白柳秀湖だが、その著書は版を重ねて広く読まれていた。最も有名な秀湖の読者は芥川龍之介である。芥川は「僕は少時白柳氏の小品を愛読した」<sup>44</sup>と述べており、「ロシヤの文学者の名前を、——殊にトウルゲネフの名前を」秀湖の本を読んで覚えるようになったと述懐し<sup>45</sup>、「白柳氏は通俗的であることを以て任じてあるかもしれませんが。けれども俗人に通じないイデエを沢山持つてみます。僕の興味のあるのはその点です(中略)世間がその点に今日よりも敬愛を持って善いと思つてみます」<sup>46</sup>と高く評価している。また『文芸的な、あまりに文芸的な』では秀湖の随筆集である『聲なきに聴く』(1926 年)を読んで「白柳氏の美の発生論は僕にも僕の美学を作る機会を与へた」<sup>47</sup>云々と述べているので、芥川が秀湖の読者であったのは「少時」に留まらなかったようだ。『聲なきに聴く』が世に出たのは、芥川の自死の前年のことであった。また、与謝野側の史料的な確認がまだ取れていないが、秀湖によれば「おかる勸平論」は与謝野晶子に賞賛されたという<sup>48</sup>。芥川と与謝野は秀湖の主に文学面の読者だったことになるろう。

「民族期」の秀湖の読者には石原莞爾がいた。石原は『最終戦争論』のなかで「私の尊敬する白柳秀湖、清水芳太郎両氏の意見を拝借して、若干の意見を述べる」<sup>49</sup>として、南北比較を軸とした世界民族論を展開し、西洋文明は覇道であるが東洋文明は王道であると主張している。民族期以降の秀湖は「マルクス主義からは縁が遠」くなり、「ドイツの気候学者ケッペンあたりから学んだ「気候帯文化論」などの色彩が強くなって、生産力・生産関係の代わりに、気候・風土を以て歴史や文化を説明するようになってい」<sup>50</sup>たので、石原はこうした秀湖の説を活用したものと思われる。

民族期以降の秀湖を批判したことが知られているのは清沢冽である。清沢と秀湖は親交があったが、秀湖からの手紙について清沢は次のように述べている。「三、四日前、白柳秀湖君が手紙を寄こした。徳義がすたれば戦争に勝っても国が減びる。国家永遠のためには敗戦したほうがいいかもしれぬといっている。ここで彼は誤謬を冒している。第一に

戦争の結果が何よりも徳義心を破壊したのだ。第二には、その戦争の責任者は誰なのだ。かれや、徳富蘇峰などが、最も大きなその一人ではないか。日本歴史や日本精神をむやみに誇張して相手の力を計らなかったのは、彼らでないか<sup>51</sup>。時局推進家として敗戦を迎えた秀湖は、石原が亡くなった翌年、1950年に亡くなっている。戦前に名声を誇っても、戦争責任を追及されて数年のうちに亡くなり、忘れられた人々がいた<sup>52</sup>。秀湖もそうした日本人の一人であった。

## 5. 白柳秀湖の研究史と現状

白柳秀湖の研究は、「駅夫日記」を代表作とする初期プロレタリア文学作家の面に焦点が当てられることが多く、彼が後半生に中心的活動とした歴史家・著述家としての面を論じた学術的研究は少ない。そうした先行研究のなかでは『思想の科学』に3回にわたって連載された、しまね・きよしによる「白柳秀湖論」<sup>53</sup>が代表的研究に位置づけられるべきだが、この論文には問題点が少なくない。同論文は転向研究であり、秀湖の小品・随筆集『新秋』の「序」に出てくる「或る強い権威」の「圧迫」を『社会主義者沿革』などに見られる麻布第三連隊の脱営事件（1908年3月）であると解釈し、更に首謀者は秀湖だったと推定して「首謀者としての秀湖にたいしては、一般脱営者よりも厳しい処罰が加えられたと考えられる。秀湖にとっては、この処罰がその転向に決定的な圧力となったのではなかろうか」<sup>54</sup>と述べて、この「序」を書いた時に秀湖が既に転向していたことを示唆する<sup>55</sup>。しかしこの事件については大江志乃夫が『凧の時』で再検証を行っており、脱営事件は第一連隊での出来事で、秀湖は第三連隊に属して事件に無関係であったにもかかわらず、『都新聞』が誤報をしたために、内務省警保局『社会主義者沿革第二』の「要注意人物名簿」にも脱営が事実として記録されてしまっていたという事情を明らかにしている<sup>56</sup>。大江にしたがえば、秀湖は脱営事件の首謀者ではなかったことになるのだが、大江の記述は白柳夏男『戦争と父と子 白柳秀湖伝』とほぼ一致しており、『戦争と父と子』以外に史料の根拠の有無が確認できないところには注意

を要する（なお、『凧の時』は小説形式で書かれている）。

秀湖自身は1910（明治43）年に「脱営兵の首領」という文章を書いている<sup>57</sup>。「明治41年3月5日都下の重なる新聞紙は皆半面を埋めて歩兵第一連隊に於ける兵卒の脱営を報じたり。かの『朝日』『国民』『やまと』『中央』は勿論、二三の新聞紙を除く外他（マ）は尽く余を以て其主領に擬し、扇動者なりと断じ、蜚語紛々として江湖に喧伝す」と述べ、「其最も滑稽なるもの」として都新聞の記事を紹介している<sup>58</sup>。秀湖はこの文章のなかで、自分が脱営事件の首謀者でないと言明してはいないが、「主領に擬し」「蜚語」という表現に注目すると、脱営事件の首謀者だったことを否定していることになるのではないだろうか。しかし警察にはマークされてしまったようで、除隊の日には品川警察署の刑事が自宅にやってきたと秀湖は書いている<sup>59</sup>。事件の影響は長く尾を引き、秀湖は1929（昭和4）年にも以下のような文章を書いている。「明治40年麻布三連隊に徴集せられ、連隊長大佐田中義一氏の指揮下に属し、王師を武相の平野に学ぶ。在営中赤旗事件あり、尋いで幸徳事件あり、退営後は政府の視察最も厳峻、生きんとして能はず、縊れんとして果さず、艱難具に嘗む。半生の努力徒にして酬いられざること現に見るが如し」<sup>60</sup>。「政府の視察最も厳峻」とは書いてあるが、脱営事件には触れておらず、「政府の視察最も厳峻」は、社会主義者への監視が全体的に強化されたということなのか秀湖個人に対するものなのかははっきりとはわからない。以上をまとめると、事実を確定させることは難しいが、秀湖が脱営事件の首謀者だったと断定することはできず、しかしその後の当局による監視を圧迫と感じていたらしい、となるだろうか。秀湖の転向がいつだったかを言うのは難しい。ただし、「国家社会主義の方向に向かった」<sup>61</sup>、「社会主義とは縁が薄くなった」<sup>62</sup>という評価はどの論者にもほぼ共通している。また転向したにせよ、昭和初期に至っても秀湖は唯物論を基本的な思考方法としていたことには注意が必要である<sup>63</sup>。

以上では秀湖の転向についての論点である脱営事件について再検討してきたが、本稿にとってしまね論文の一番の問題は、『二千六百年史』と『維新

革命前夜物語』の解釈である。しまねは秀湖が 1916 (大正 5) 年に刊行した『二千六百年史』の題名をとらえて、この時すでに皇国史観に転じているとするのだが、「秀湖が後になって著わしたところの(中略)『維新革命前夜物語』(昭和 9 年、千倉書房発行)(中略)などの歴史観などと比べて、かなりの年代的な開きがあるとしても、『二千六百年史』の歴史観がそれほど異なっているとは言えない」<sup>64</sup>として、検討の対象を『維新革命前夜物語』にスライドさせてしまい、その後結局最後まで『二千六百年史』の本文を検討していない<sup>65</sup>。

しかし、『二千六百年史』という題名だけで秀湖が皇国史観に転じたことと断定するのは誤りである。なぜなら、秀湖は同書「凡例」で「『二千六百年史』いふ文字は、本書の名称としては余りに古い。何となれば、近頃の研究によると日本の建国は西紀四百六十一年の事で、漸く千五百年ばかりを経過した所であるといふ説が有力である」<sup>66</sup>と述べているからである。皇国史観に転じているならば、「近頃の研究」が何と言おうが「紀元は二千六百年」という立場をとらなければならない。また、『維新革命前夜物語』が『二千六百年史』よりも 10 年以上後の作品である。皇国史観に立てば、日本は万世一系の皇国であり、革命を必要としなかったところに日本国体の優越性がある、などと論じるのが普通である。皇国史観から明治維新を「革命」だとする論理は出てくるだろうか。『維新革命前夜物語』前後のみ皇国史観をいったん捨てたと考えるのも無理であろう。それでは 1930 年代以降の秀湖の転向があまりにも目まぐるし過ぎる。また、随筆類にも目を配ると、この頃の秀湖が日本人に対する客観的な見方を失っているわけではないこともわかる<sup>67</sup>。天皇機関説事件の際に(1935・昭和 10 年)、美濃部達吉を慰問する手紙を送ったという事実をここに付け加えることもできるだろう。美濃部からの礼状が残っている<sup>68</sup>。皇国史観に立って美濃部を擁護するというのは考えにくい。

『維新革命前夜物語』の解釈も誤りである。しまねは「これは日本の社会階級が、経済の自然の発展によつてのみ形成され、有史以後他から侵入した異民族の征服によつて形成された事実のないことに基因する。特に徳川時代に入つて発達した町人階級

の権利の如き、町人がその支配者である将軍の政府から闘い取つたものは殆ど一つもないといつてよい(中略)戦い取る代りに、金力で買取つたと認むべきものさへない。すべてが自然の発生であり、自然の発展である」<sup>69</sup>という文章のなかの「有史以後他から侵入した異民族の征服によつて形成された事実のないこと」という文に注目して「敗戦直前の『皇国必勝の道』という秀湖の皇国史観と直結する」<sup>70</sup>と解釈しているが、この文章の力点は、日本が有史以来異民族に征服されることがないというところではなく、「すべてが自然の発生であり、自然の発展である」という結びの文におかれている。そう読めるのは、第 2 節で示した通り「為される」歴史観から「成る」歴史観への転換が本書の基本姿勢だからであり、「成る」歴史観は「自然の発生・自然の発展」と対応した表現である<sup>71</sup>。またこの観点は、秀湖が他の作品でも繰り返し強調していることである<sup>72</sup>。

仮に『維新革命前夜物語』を皇国史観の書物だと規定するならば、着目しなければならないのは、抜け参りが流行する周期が幕末に向けて短くなっていき<sup>73</sup>、かつそれを「京都の市民生活からうまれた一種の尊王敬神運動」<sup>74</sup>だと主張していることである。しかし秀湖の説に従うならば、抜け参りの頻度は高まっていくのだから、叙述が進むにつれて「抜け参り＝尊王敬神運動」説への言及が増えていかなければならないはずだが、むしろ本書後半ではほとんど触れられなくなっていく。「抜け参り＝尊王敬神運動」説は本書冒頭で新視角として提示されたものではあるが、主題化されるには至らなかったと読める。

しまね論文は秀湖の基本的な立場もとらえ損ねている。例えばしまねは秀湖『現代財閥罪惡史』にある「社会的に人物を考察するものと、政治的に人物を考察するものとの見解の岐れる所だ」という文を引用した後に秀湖を「政治的に人物を考察するもの」の方だと理解してしまっているが<sup>75</sup>、これは逆であり、政治的にではなく社会的・経済的に考察しなければならないというのが秀湖の基本的な立場である。例えば『維新革命前夜物語』に先立つ『日本富豪発生学 下士階級革命の巻』では、明治維新は岩倉具視を盟主に頂く各藩下士階級による「下士

階級革命」だと説き、「藩閥」という言葉を自明視して、藩同士の対立関係から明治維新を捉えるのは「政治的」な歴史の見方であり、正しい歴史は社会的に考察した歴史だと主張している<sup>76</sup>。しまね論文にはこのほかにも根拠薄弱と思われる箇所があり<sup>77</sup>、研究としての緻密さに疑問を感じざるを得ない。ただし付言すると、本稿は秀湖が転向しなかったと主張して彼の「救済」を目的とするものでもない。秀湖が1945年5月になっても「今次大戦は必ず皇国の必勝利に終ること一点の疑ひもない、皇国民にして最後の一人まで頑張るならば彼等は必ず無益な戦争の愚を悟るであらう」<sup>78</sup>と書いており、戦時中には秀湖も皇国史観に立っていたのは事実である。

秀湖の歴史家としての側面に焦点を当てた研究には他に、既に引用した上笙一郎の論文がある。上は、大衆史論家へと向かったこと自体が秀湖が転向したことの現れであり、ナショナリズムによって、維新史の論じ方が「維新革命」の性格よりも対外危機克服の礼賛に向かったという点で徳富蘇峰・山路愛山の遺鉢を継ぐ結果となった、と評価している<sup>79</sup>。また阿部猛「白柳秀湖の日本民族起源論—『新版民族日本歴史 建国編』に見る—」<sup>80</sup>は1ページのみの研究ノートだが、秀湖『民族日本歴史 建国編』を、古代国家の成立過程を考えるうえで鉄の果たした役割に着目した早い例に位置づけ、「この面での先駆的な業績は殆ど“民間研究者”によってになわれてきた事実を知る必要がある（中略）白柳の著作についても読み直しが必要かもしれない」との評価を与えている。最新の研究には齋藤桂「日本の」芸能・音楽とは何か——白柳秀湖の傀儡子=ジプシー説からの考察」があり、秀湖『東洋民族論』、『日本民族文化史考』などにみられる「傀儡子=ジプシー説」から、近代日本において「何が「日本らしい」芸能・音楽だと考えられ、また何がそこに収まらないものとして排除されてきたのか」<sup>81</sup>が考察されている。なお齋藤は「大逆事件以降、政治思想・政治運動からは遠ざかっていたとされる白柳ではあるが、具体的な活動はさておき、歴史観・社会観はかつてと比べて大きく「転向」しているわけではない」<sup>82</sup>と述べており、筆者も基本的にこれと同じ立場をとる。

## 6. 小括と展望

ここで次稿での論点を示すことで、白柳史学序説としての本稿をひとまず終えることとしたい。論点は主に以下の2点である。

『維新革命前夜物語』の、読み直すに値する箇所はどこか。まず、デフレ・インフレ循環の発端となった元禄改鋳を執行した荻原重秀と、その政敵・新井白石を論じた箇所である。荻原は悪貨を濫造してインフレを起こした勘定奉行として悪名高く、その評価が覆ることなく歴史に消えていったかに見える人物であった。秀湖も全体としては荻原の政策を悪政と評価しているが、一定の擁護を試みている。また興味深いのは、『折たく柴の記』読解を通じて、改鋳問題をめぐる新井白石の責任を追及している点である。荻原が長く悪評にさらされ続けたのには、白石が『折たく柴の記』のなかで激烈に批判したことが大きい。しかし秀湖は荻原の評価について白石に引きずられることがなかった。議論は緒に就いたばかりとの感があるが、近年では荻原再評価の動きがある<sup>83</sup>。秀湖はこの論点についてかなり早く先鞭をつけたと評価することができるのではないかと。

次いで、松平定信の政治を単なる「善政」の二字に尽きていたと評することを伏線として、後に続く水野忠邦を「強力政治家」として対置した箇所である。これは、近年の研究が示す、幕末における「明君」像の転換と合致してもいる<sup>84</sup>。

秀湖が『維新革命前夜物語』で最後に示す新視覚は、水野忠邦の天保の改革は、徂徠が『太平策』で示した策を敢行しようとしたものだった、という説である。秀湖は、『太平策』と水野忠邦の施策が事実として合致すると言うのみで、忠邦と徂徠学の直接の関係を示さない。しかし、秀湖が論じなかった部分は、水戸学と幕末の水戸藩が媒介となるのではないかと。多くの研究が後期水戸学成立に最も影響を与えたものとして挙げるのは徂徠学であり、また幕末の藩政改革で最も範とされたものの一つが徳川斉昭による水戸藩政改革だった。秀湖の史眼は焦点をとらえていたのではないかと。

以上の論点を検討した後に、最終的には、白柳史学を、山路愛山、竹越三叉、三宅雪嶺らが形成した、明治以来の民間史学の系譜の中に位置づけることが本稿の目標である。

## 参考文献 等

芥川龍之介『芥川龍之介全集』岩波書店、1978年  
石原莞爾『最終戦争論』中央公論新社、1993年  
市村弘正編『論集 福沢諭吉』平凡社、2017年  
大江志乃夫『風の時』筑摩書房、1985年  
小澤実編『近代日本の偽史言説——歴史語りのインテレクチュアル・ヒストリー』勉誠出版、2017年  
しまね・きよし『明治社会主義者の転向』東洋経済新報社、1976年

白柳秀湖『維新革命前夜物語』千倉書房、1934年  
白柳秀湖『強者弱者』東亜堂、1914年  
白柳秀湖『西園寺公望伝』日本評論社、1929年  
白柳秀湖『社会講談選集』大鏡閣、1925年  
白柳秀湖『食欲と愛欲』千倉書房、1931年(1931a)  
白柳秀湖『二千六百年史』東亜堂書房、1916年  
白柳秀湖『日本富豪発生物学 下士階級革命の巻』千倉書房、1931年(1931b)  
松本三之介編『明治思想集 3 近代日本思想大系 32』筑摩書房、1990年

- 1 「福沢諭吉と荻生徂徠」市村 2017、p.53
- 2 没後十年ほどはそうではなかったことを上笙一郎が伝えている。以下は1962年の文章である。「私の部屋の書架には、白柳秀湖の著書が20冊ばかり並んでいる(中略)私の部屋へ来た人は、たいてい、「秀湖という存在はおもしろい。自分も大いに興味を持っている。」という。」「白柳秀湖についての一考察」、日本文学協会『日本文学』11巻6号p.22)。
- 3 初版は1934(昭和9)年、改訂版は1947(昭和22)年に出ており、秀湖は1950(昭和25)年に亡くなる。
- 4 秀湖は山路愛山の史論を読んだのは1908年の入営の前後だとしており、愛山の史論に刺激を受けて自らも史論の筆を執ったのが『町人の天下』だったものと考えられる。
- 5 白柳 1929、p.9
- 6 一般に維新史への関心が高まっていった時期でもあった。「司馬遼太郎の小説に見えるような、俗流の「維新」史観が広く流布した始まりは、昭和初期の明治維新ブームでしょうね。昭和3(1928)年、明治維新60周年の年に、11月3日の明治天皇の誕生日が明治節として大規模に祝われ、一週間後の昭和天皇の即位礼とあわせて、全国でイベントが続いている。高知の桂浜に坂本龍馬の銅像が建ったのも同じ年です(荻部直・三谷博対談「佐幕」「勤王」の対決史観はもうやめよう」、『中央公論』2018年4月号)
- 7 1941(昭和16)年刊行。明治後期から政府は「維新史料」の編纂を進めていたが、ようやく完成を見たのは第二次世界大戦中のことだった(上掲荻部・三谷対談)。
- 8 白柳 1934、p.1
- 9 秀湖は「福沢諭吉と荻生徂徠」でも、「徳川氏の封建制度がいつ以来、これに対して、最も妥当なしかも最も徹底的な批評を下し得たものは何と云っても荻生徂徠である。新井白石も、松平楽翁も史論家として考証家として、相当の業績はのこして居るが、荻生徂徠に比べると著しく影がうすくなる」と述べている(市村 2017、p.53)。
- 10 白柳 1934、pp.1,2
- 11 ただし後述するように、秀湖が否定しているのは「上からの」尊王思想の作用であり、「下からの」尊王思想の作用についてはむしろ新たな観点として提示している。それが「ぬけ参り=尊王思想」説である。
- 12 白柳 1934、p.14
- 13 白柳 1934、pp.14,5。なお「皇統の正潤を論じたり、皇位継承の争鬭を中心として捲起された臣子の去就(大義名分)を論じたりすることが、果たして正しい手法であろうか」という一文は、後に論じる秀湖が皇国史観に転向していたか否かという点と関係がありそうにも見えるが、この箇所は戦後に書かれたものなので、戦前・戦中の転向とは関係がない。
- 14 白柳 1934、p.15
- 15 白柳 1934、p.12
- 16 白柳 1934、p.11
- 17 白柳 1934、p.12

- 18 同上。
- 19 白柳 1934、p.9
- 20 白柳 1934、pp.12,3
- 21 白柳 1934、p.13
- 22 白柳 1934、p.14
- 23 白柳 1934、pp.18,9
- 24 秀湖は文久の改革を「上士階級革命」と規定する。
- 25 白柳 1934、p.368
- 26 同上。
- 27 市村 2017、pp.48-52
- 28 白柳 1934、p.21。なお日付について、同p.24では「10月1日」としており、どちらが正しいのか不明である。
- 29
- 30 初期社会主義者の頃(1907・明治40年)の文章だが、秀湖は「直接行動の意義」と題した論説を書いたこともあった(松本 1990、pp.61-3)。
- 31 上掲の上笙一郎論文、p.22
- 32 『維新革命前夜物語』のなかで、富士山の宝永大噴火(宝永4・1707年)の際に気質が被災し、そこから琉球菌を特産品とするなどして復興していったという逸話を挿入しているのは(白柳 1934、pp.77-83)、秀湖の生地だったためであろう。
- 33 こうした側面は、後年でも『食欲と愛欲』(1931・昭和6年)や『山水と歴史』(1934・昭和9年)、『自然・人間及び労作』(同年)などの著作に顔を覗かせることになる。
- 34 「転向前/転向後」で分けることも可能かもしれないが、本稿で詳述するように、秀湖がいつ転向したのかを確定するのは難しく、確実に転向したと断定できるのは1940年代になってしまい、それでは分類として意味を成さないため、本稿では文学期・史論期・民族期に分けることとした。
- 35 堺を三宅雪嶺に引き合わせたのは秀湖だったという。
- 36 ただし、堺は愛山の同僚として働いたことがあり、秀湖は主に愛山の読者であったため、関係のあり方には違いがある。なお愛山が1865年生、堺が1871年生、秀湖が1884年生である。
- 37 「駅夫日記」は筑摩書房『明治文学全集』など各種文学全集に繰り返し収録されており、『国文学 解釈と鑑賞』の「日清・日露戦後の文学」特集(1972年8月)でも取り上げられ、比較的最近の研究にも住田利夫「白柳秀湖「駅夫日記」を中心に」(『部落問題研究』147号、1999年)がある。また『黄昏』研究としては榎内裕子「白柳秀湖作「黄昏」におけるツルゲーネフの影響」(『ロシア文化研究』3号、1996年)、紅野敏郎「本・人・出版社(137)白柳秀湖の『黄昏』(如山堂書店)」(『国文学 解釈と鑑賞』2010年7月)がある。
- 38 秀湖の経済史的な観点は愛山に淵源があり、そこに階級闘争史観も加わっている。
- 39 『西園寺公望伝』執筆時の取材過程で西園寺との関係ができたことによるのだろうか。
- 40 市村 2017、p.49
- 41 市村 2017、pp.59,60
- 42 「直接行動の意義」(松本 1990、p.62)。なお、続きに「カーライル、エマルソン等の詩歌的民主主義と、トクヴェーユ一派の反

動的保守主義とは相合して、議院政治、民主政治の弊害欠点を批難する声となり、19世紀の後半において稍有力なる勢力となれり」(松本1990、p.62)とあるのは、当時のトクヴィル観を示すものとして興味深い。

<sup>43</sup> 白柳1993、pp.147-8

<sup>44</sup> 芥川1978(第8巻)、p.388

<sup>45</sup> 芥川1978(第8巻)、p.144

<sup>46</sup> 芥川1978(第8巻)、p.388

<sup>47</sup> 芥川1978(第9巻)

<sup>48</sup> 白柳1931a、p.41。「おかる勘平論」は、不貞は自殺してでも申し訳をせねばならぬのに、「おかる」のように、夫に忠義を全うさせるためなら身売りをしても非難されないのはおかしいのではないか、またそれが非難されないのは、「心がきれいなら肉体が汚されるのは問題ではない」という精神主義によるのではないかと主張する。秀湖には女性論も多く、夫婦間の「凌辱」を指摘しているのは早い例に属するようと思われる(白柳1931a、p.13)。

<sup>49</sup> 石原1993、p.78

<sup>50</sup> 前掲上笠一郎論文、p.26。更に上は「そのかぎりでは、たしかに、広い意味で「転向」と呼ぶことも許されるかもしれない」と続けている。

<sup>51</sup> これについては大江志乃夫が「早くも日本の勝利が亡国につづることを見きわめ、勝利よりも敗戦を望むと言いきる勇気を持っていたことに、往年の白柳の面目を見ることができる。清沢にしても、「戦争の結果が何よりも徳義心を破壊した」というが、そうではない。結果がどうであろうと、戦争そのものが国民の徳義心を破壊したのだ。それが戦争の本性である。そこを見きわめていないという点で、清沢の目もまだあまい」と評している(大江1985、ちくま文庫版はp.444)。

<sup>52</sup> 例えば、近年では再評価が進んでいる橋本国彦(1904-49、作曲家。戦争責任から東京音楽学校を辞した)がいる。対照的なのは、戦争責任を追及されながらも戦後10年以上生きて名を残したように見える徳富蘇峰(1863-1957)と山田耕筰(1886-1965)である。もちろん、戦前における知名度の度合いは考慮しなければならないが。

<sup>53</sup> 『思想の科学』に1971年1月から3月にかけて掲載され、後にしまね・きよし『明治社会主義者の転向』に収められた。

<sup>54</sup> しまね1976、p.246

<sup>55</sup> 小田切秀雄は「秀湖はすでに明治41年に転向したという見解」を述べている(しまね1976、pp.217,8)。

<sup>56</sup> 大江1985、ちくま文庫版はpp.340-345。なお秀湖の「脱党事件」は、同書の主なエピソードの一つである。

<sup>57</sup> 白柳1914、pp.309-317。大江1985は、小泉三申が、秀湖の安全のために書かせたものだとしている。「堂々たる指揮官にして、大教育家たりし田中大佐は斯くの如くにして又一个の堂々たる大政治家なりき(中略)余の生涯に忘る可からざる恩人の一也」(白柳1914、p.317)と書いているのが根拠だろうか。なお、秀湖が脱党事件の首謀者だったと推定するしまね論文がこの文章に言及していないのはやや不可解である。

<sup>58</sup> 白柳1914、pp.313-5

<sup>59</sup> 白柳1914、p.316

<sup>60</sup> 『現代大衆文学全集20 白柳秀湖集』(平凡社、1929年)巻末の「略歴」

<sup>61</sup> 鶴見俊輔(しまね1976、p.234)

<sup>62</sup> 大江1985、ちくま文庫版はp.444

<sup>63</sup> 例えば「この本に出てある著者の史観は、人によるとやはり、唯物云々といふかも知れないが、これは明白に日本式経済史観といふべきものではあるまいか」(柳田泉による『維新革命前夜物語』評、『書物展望』昭和9(1934)年6月号p.40)。また秀湖の史観は「通俗/俗流唯物史観」と評されることが多い。

<sup>64</sup> しまね1976、p.221

<sup>65</sup> にもかかわらず「このような『二千六百年史』の思想は」(しまね1976、p.222)と述べてしまっている。

<sup>66</sup> 白柳1916、凡例p.1

<sup>67</sup> 例えば、心中は日本独特の現象だから研究に値するのに、「日

本人の癖として、例の国民性の相違などに結付け、好い加減に片づけてしまった」と、すぐに日本特殊論で片づけてしまう傾向を批判的に見ている(白柳1931a、p.22)。

<sup>68</sup> 白柳夏男『見返しの形見草 補遺 白柳秀湖伝』(西田書店、1993年)pp.60-1

<sup>69</sup> しまね1976、pp.221-2

<sup>70</sup> しまね1976、p.222。なお「皇国必勝の道」に二重カギカッコが付されているが、この文章は新聞に寄稿したものであって単著の書名ではない。1945年5月20日の毎日新聞に掲載された。なお、史料調査に当たっては毎日新聞社・大谷津統一記者の協力を得た。記して謝辞としたい。

<sup>71</sup> 白柳1934、p.2。付け加えておくと、しまね論文はこの「為す」と「成る」の違いについての一文を引用している。なお「成る」の原因は「凡そ社会の或る制度、その制度の基調する或る経済組織が、成熟の極みに達し、完全にその存在の意義を果した場合には、その内部に制度それ自体、組織それ自体を崩壊させる酵母菌が発生する」(同頁)からであり、これはもちろん唯物史観に立った見解である。

<sup>72</sup> 本書でもこの立場は繰り返されている。例えばpp.176,193など。

<sup>73</sup> 秀湖はここに飢饉の周期が短くなっていくことも重ねて見ており、それは、元来は自給自足体制であった幕藩体制の経済システムが貨幣経済体制へと移行しつつあることの矛盾の表れであると解している。

<sup>74</sup> 白柳1934、p.43

<sup>75</sup> しまね1976、p.262

<sup>76</sup> 白柳1931b、p.4。なおしまね論文はこの後で「秀湖は権力をめぐるさまざまな政治的行動の背景に、その経済的利害関係を想定している」(しまね1976、p.266)と述べており、この見方自体は誤りでないが、全体としては解釈が不統一になっている。

<sup>77</sup> 例えば「秀湖が理論的原理に忠実であるような型の人間ではなく、仲間との付き合いにより大きな価値を見出す型の人間であった」(しまね1976、p.233)と述べるのだが、「秀湖が広い仲間づきあいを大切にしていた」と「推察」する根拠は山口孤剣が秀湖に宛てた「大久保派と、神田派との葛藤を調停するものは君ではないか」(『社会新聞』明治40年10月6日付、第19号)(しまね1976、p.236。なお「大久保派」は幸徳秋水派であり、「神田派」は片山潜派。それぞれの住所による通称)という手紙である。しかしこれだけで「秀湖が広い仲間づきあいを大切にしていた」とする根拠として十分だろうか。他の箇所では「秀湖がみずから語っているように、秀湖は他人との争いを好まない」

(p.253)と述べているが、当人の性格は当人の説明によって決まるものではない。なお秀湖は生田萬事件や西園寺公望の履歴などをめぐって竹越三又とたびたび論争を交わしており(生田萬事件=白柳1934、p.332。西園寺公望=白柳1929、pp.91,101,102)、『火鞭』では山路愛山とも論争している。また人付き合いに関して「つきあいを大切に生き方は、一面においては、日本人としてきわめて典型的な生き方でもある」という一文があるが、これも根拠が不明である。

<sup>78</sup> 前掲「皇国必勝の道」

<sup>79</sup> 同上p.29

<sup>80</sup> 『日本社会史研究』26号、p.12(1989年7月)

<sup>81</sup> 小澤2017、p.292

<sup>82</sup> 小澤2017、p.291

<sup>83</sup> 村井2007。村井は元禄改鋳後のインフレについて、改鋳よりも凶作によるところが大きかったとの見解を示している。これに対し藤田覚『勘定奉行の江戸時代』(筑摩書房、2018年)は、やはり改鋳の悪影響は明らかだとしており、議論が生じている。

<sup>84</sup> 磯田道史「水戸藩天保改革の同時代的評価と影響 新史料「水戸見聞録論」の分析」(『茨城県史研究』2011年3月)は、「明君」のイメージが「仁心」から「剛徳」に変容していったと論じている。なお、「剛徳」の明君を体現していたとされるのは、水野忠邦と因縁浅からぬ徳川斉昭である。